

2023年
2月

マナ通信



今月のマナ通信は、
◎12月の週日の聖書日課（エレミヤ書、ピリピ人への手紙、哀歌）
◎土・日曜日の学び（救い主の預言と成就、捕囚と帰還）の感想です

まことに、【主】はこう言われる。『バビロンに七十年が満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにいつくしみの約束を果たして、あなたがたをこの場所に帰らせる。わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている——【主】のことば——。それはわざわざではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたがたがわたしに呼びかけ、来て、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに耳を傾ける。あなたがたがわたしを捜し求めるとき、心を尽くしてわたしを求めらば、わたしを見つける。わたしはあなたがたに見出される——【主】のことば——。わたしは、あなたがたを元どおりにする。あなたがたを追い散らした先のあらゆる国々とあらゆる場所から、あなたがたを集める——【主】のことば——。わたしはあなたがたを、引いて行った先から元の場所へ帰らせる。』（エレミヤ29:10-14）

エレミヤは祭司の子として生まれ、預言者に召されました。エレミヤが預言を開始したのが前627年と言いますから、その頃サマリアに首都をおく北王国イスラエルが既に滅亡しており（前722年）、ほとんどの国民はアッシリヤに捕囚民とし連れ去られていました。ここで、南王国ユダの住民は神の民としての自覚を持ち、この事を覚えて真の神に立ち返るべきだったのです。

しかし、ユダの民は考えを変えませんでした。イスラエルを取り巻く諸外国の勢力が変わります。アッシリヤは、ヨシヤがユダの王になる頃には、勢力が衰え変わってエジプトが勢力を北に伸ばし、当時の王であったネコはユダ王国に脅威を与えました。一方バビロン王国もネブカデネザル王のすぐれた指導力により勢力をパレスチナ地域に伸ばしつつありました。

預言者エレミヤはそんな不安定な時代に活躍した人でした。実際5人の王に仕えましたが2人は在任3ヶ月の短命王でした。3代目エホヤキムは11年間王として在籍しましたが、王としては失格で、偶像礼拝に走り、形ばかり有利な預言をする者を優遇し、真実でも苦難の道を預言する者を迫害しました。この事はゼデキヤ王にも見られます。お気に入りの預言者がハナンヤでした。偽予言者ハナンヤは預言しました。「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる2年のうちにわたしは、バビロンの王ネブカデネザルがこの場所から奪い取ったものを全てこの地に戻す。捕囚の民もわたしはこの地に帰らせる。」

この言葉はゼデキヤ王を喜ばせました。そして彼は、周辺の国々に呼びかけ、バビロンに戦いを挑みました。しかし、逆に打ち破られてしまいました。不信仰と、偶像礼拝を悔い改め、神に立ち返る為に、神が愛とあわれみをもって備えられた試練でした。

エレミヤの預言を聞き入れるべきでした。エジプトに助けを求めず、バビロンと和解し、友好関係を持つことが大事でした。最後の王ゼデキヤはバビロンの支配下で名だけの王であったが反逆したため、バビロンに攻められ、前586年、南王国ユダは崩壊しました。

神様は約束をたがえません。神様は先が見えているのです。しかし、人間は原罪を持っており、サタンの誘惑に陥り、罪を犯します。目に見える偶像よりも目に見えない御霊の神が大事なのです。

エレミヤも、メシヤの出現の預言をしていますが、主はもうすぐ人間の形を持ち、救い主としてこの世に来て下さいます。その時、我々は罪の死からいのちへと変えられるのです。エレミヤ書は神に信頼する確かさを教えてくれていると思います。（畑中伸之）



私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。」（ピリピ1:21）

「生きることはキリスト」ということばは、〈みことばを味わおう〉によりますと、私はキリストのために生きる、私によってキリストが崇められるといった、キリストとの相対的な関係を言っているのではありません。私自身の生がキリストと一体であると言っています。と

そして、ガラテヤ2章20節「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」という告白ともつながっています。と解説されておりました。

また、主であるイエス様が知識の有無も信仰生活の長短も、すべてを超えて、信仰者のうちに生きてくださるとは、なんと大きな恵みではないでしょうか。

「生きることはキリスト」は私たちの信仰そのものとなり、私たちの心の深みに在り、私たちをどんな時にも支えるものです。と記されておりました。

所沢の集会では、毎週金曜日に「使徒の働き」の学びをしております。短い箇所ですが、使徒20章13-17節の学びの時に、（パウロの伝道旅行は常に命がけでありましたが）、医者ルカと他の兄弟たち（計8人）はトロアスで船に乗り込んでアソスに向けて船出しましたが、なぜかパウロは一人だけ船に乗らず、陸路（約30キロ）をとったと記されています（使徒20:13）。

アソスでは、また一行と落ち合い船に乗るのですが、この約30キロの陸路をパウロは「なぜ一人で徒歩で行ったのか」と質問がありました。その正解は聖書に記されているわけではありませんが、「パウロは一人になって、歩きながら、主と個人的な交わり、主に祈りながらの大切な時間」であったのではなかったかと想像した説明がありました（ちょうどイエス様が弟子たちを離れて、ひとりガリラヤの山で祈りの時を過ごされたように）。

短いフレーズですが、「パウロ自身は陸路をとるつもりでいて、そのように決めていたのである」（13節）とあり、パウロが何を一番大切にしていたかを教えられた気がしました。

私も、これから生きる上での動機すべてが、主に祈り、主との交わりからでありますようにと、願わずにおられませんでした。（福島三弥子）



Iレミヤももう一度しっかり読み直したいと思われました。嘆きの預言者という表面的な知識しかありませんでした。

耳障りのよいハナンヤの言葉に従ったゆえに、ゼデキヤはバビロンに引いて行かれて恐ろしい目に遭いました。エレミヤという真の主の遣わされた預言者の言葉には、従わなかったのです。

自分の希望に添っている方に耳を傾けてしまったのです。自分の思いを優先してしまったのでしょう。日々、主からの言葉は何か自分を空にして、探し求めたいものです。

ユダの民の神殿に、女神アテナの偶像も祀ってあった、というのも驚きでした（56頁後）。生ける真の神以外の物を崇めるのは不信仰、と常に自分の心を見張る必要を覚えました。

こんな不従順な民を見放さず、一緒にエジプトについて行くエレミヤは、凄い預言者だったのだなあと、ため息が出ました。

主も私を戒めたり慰めたり助けたりしながら、信仰から逸れないように守って下さっていることに、感謝です。今年は思い巡らす、瞑想することを、心がけたいと思われています。（広瀬裕子）

いのちにあふれた力強い勝利の生活」（尾山令仁著／ローマ教会への手紙）を望まぬクリスチャンはいないでしょう。私も望むところ、大です。それは、いのちにある力強い（勝利）する生き方であり、イエス・キリストによってできる、というのですが、それはどういうことかなと思っていました。

一方で、ロイドジョンス兄のロマ書講解の先の方に目を通していたら、「恵みの働き」という中に、そのヒントと考えることが書いてありました。「ことによると、恵みの力という点で最上の例」として取り上げられているのが、以下のようなことです。

パウロがとげを取ってくださいと神に3度も願った時、神の答えは「わたしの恵みはあなたに十分である」でした。このことからパウロさんが学んだのは、「私が弱い時にこそ、私は強い」です。とげを持ったままのパウロさんは、そのとげを自分の力ではどうすることもできないという限界に至らされ、そんな自分に頼ることができなくなり、当然のように、主に頼った。肝心なのは主が支配される恵みの力なのだ、と悟るときにこそ「強い」のだ、ということです。

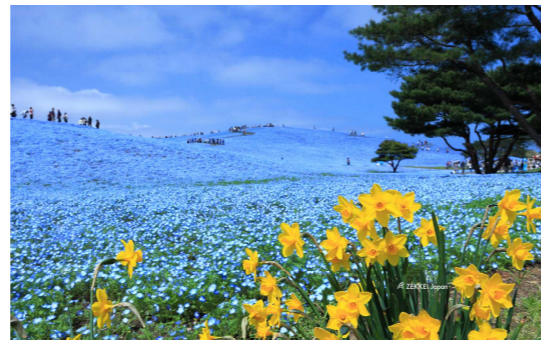
自分の弱さを知り、主の恵みに頼るなら、「なおさらのこと」「満ち溢れる」「最高の豊かさ」である恵みが支配して下さる。そうするなら、いのちにあふれた勝利の生活が始まりそうです。

始めから主に頼ればいいものを、現実には、私が主より先に来たり、上にあったりして、自分の考えや力でやってしまうのです。それで、私の弱さや駄目さをいやというほどに見せられるならば、自分を手放して主を頼ることへと向かうようになるようです。

だからこそ、主は私を追い込み、自分の力を手放させる必要があるのでしょう。自分を落とされた分、主に頼るようになり、また、恵みの「なおさらのこと」「満ち溢れる」「最高の豊かさ」を知れば知るほど、「主の恵みに頼るは楽し」になるのではないのでしょうか。

今は、主の恵みにより頼むためにも、主の恵みの性質と働きについて、「なおさらのこと」「満ち溢れる」「最高の豊かさ」を、祈りつつ良く読み込みたいです。（高橋美枝）

てすから、キリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、あなたがたは同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、思いを一つにして、私の喜びを満たしてください。」（ピリピ2:1-2）



2章1節から4節までは、兄弟姉妹の一致が求められています。私たちは、イエス様の十字架の贖いによって罪赦され、神の子とされ、教会という交わりに導かれました。

この世のものを超えた、この素晴らしい教会の交わりにも、利己心や虚栄心が入り込む危険が記されています。イエス様の救いにあずかっている私にも多々あります。

また、6節から8節では、イエス様の謙遜について記されていることにも目がとまりました。永遠の時間と無限の支配の中で、栄光と誉れのすべてをお持ちになったお方が卑しい人間の姿をとられたことは、なんとという大きな謙遜でしょうか。しかも、仕える者（しもべ）として歩まれ、呪われた十字架の死にまで、神様のみこころに従われました。

11節は「父なる神に栄光を帰する」とのことばで締めくくられています。6-11節は初代教会の賛美

歌であったそうです。賛美もまた一致の心を持たなければ、神様に喜ばれる供え物とはなりません。兄弟姉妹と心を一つにして栄光のイエス様をほめたたえましょう。（木村邦夫）

神に近づきなさい。そうすれば、神があなたがたに近づいてくださいます。」（ヤコブ4:8）

アダムが罪を犯した瞬間から、主と人間との間には距離が生まれました。「あなたはどこにいるのか」と主があえて呼びかけなくてはならないほど、人間の心は主から離れたのだと思います。

主はイエス様を通して和解の道を開き、導き、私たちの悔い改めの応答を待ってくださいました。主を信じ救われた私たちに対しては、さらに神様に近づくことを勧められています。

目の前に広がる物事に執着しがちですが、シンプルに神様に近づくことを主は喜んでくださるのだなと思います。（永井亮子）

あなたの神、主が、私たちの歩むべき道と、なすべきことを私たちに告げてくださいますように。それが良くても悪くても、私たちは、あなたを遣わされた私たちの神、主の御声に聞き従います。私たちの神、主の御声に聞き従って幸せを得るためです。」（エレミヤ42:3.6）

コロナ禍、ウクライナ戦争、暗殺、物価高騰、等々、激動の2022年も終わりを告げ、新たな2023年が始まりました。

今年がいかなる年になろうとも、私の歩むべき道となすべきことを、主に尋ね求めてゆきたいと思えます。主の御計画の中にいる私たちは、恐れることなく、ただ主に信頼して従ってゆくのみです。（外處トミ）

静まりて ただ主の御声 聞き入れば
闇路は去りて 光の中へ

2022年12月31



群馬県榛名湖

わたしはこう祈る。あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、それによって、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり、イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至るように。」(ピリピ1:9-11)

年末年始は町が賑やかに飾り付けられ、お店にはお得なセール品がたくさん並びます。あれもこれも目を引きますが、本当に大事なものはそんなに多くないのかもしれない。

神様に守り導かれていることを覚えて、今日も歩いていきたいです。(外處光歩)

また、私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいませ。私たちの父である神に、栄光が世々限りなくありますように。アーメン。」(ピリピ4:19-20)

神様は私たちのためにひとり子イエス様をこの世に遣わし、十字架の上にささげてくださいました。無限の愛を注ぎ、私の必要をすべて満たしてくださる神様に感謝します。どんなときも主に目を向けて歩いていきたいと思えます。(外處結実)

私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」(ピリピ:3:10-11)

40年位前、私がまだ学生だった頃、「愛は絶望の彼方に 不屈の青春を生きたある少女の記録 (ジョニー・エレクソン著)」という本を読んだことがあります。

青春の真っ只中に事故で体が動かなくなってしまうことを通じて、信仰が明確に与えられて希望を持つようになったという内容だったことを今でも覚えています。

試練が訪れた時、著者は神様を大変恨んで、神様の嫌われるようなことをわざと考へたりして、人生に絶望していました。

しかし、いろいろな神様の取扱いの中で、神様の愛に気が付いて真の信仰に入ったと記されていました。健康な時には、決して得られなかった神様へ愛と信仰が、深い絶望のその先で見つかったのです。

「私たちが弱い時こそ、私たちは強いのです。」との御言葉からも苦難によって聖められ、そこから復活した喜びを与えられるキリスト者の歩みについて改めて教えられました。(外處徳昭)



キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。」(ピリピ2:6-9)

キリストは、永遠の昔から、天の様々な栄光を御父とともに楽しんでおられましたが、「神としてのあり方」を「何としても持ち続けなければならないもの」とはみなされませんでした。

失われた人類が贖いを必要とした時、主は「神としてのあり方」、天の喜び、安らぎ、満足を喜んで放棄してくださったのです。「しもべの姿をとり、人間と同じようになられました」

キリストは、ご自分を空しくしてくださいませ。主は、それまで決して持っておられなかったもの、「人としての性質」をご自分のものとされることによって、ご自分を空しくされたのです。

主はご自分の神性をお捨てになったのではなく、単に、天でのご自分の場所を、あくまでも一時的に離れてくださったのです。もし主が単なる人間にすぎなかったなら、これはご自分を空しくされる行動ではなかったでしょう。

私たちは、この世に生まれることによって自分を空しくするわけではありません。しかし、神様にとって「人間になる」ということは、ご自分を空しくされることでした。

主は「しもべの姿」をとられました。救い主の受肉と生涯は、ヨハネ13章4節の美しい御言葉によって要約されています。「イエスは……上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。」

「手ぬぐい」は奉仕のしるしです。それは奴隷が使う物でした。それが主イエスによって用いられたのは、主が来られたのが「仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるため」だったからです(マタイ20:28)。

ピリピの聖徒たちの間には争いがありました。パウロは彼らに、キリストの心を持つようにと勧めました(ピリピ2:5)。手短かに言えば、「もしキリスト者たちが自ら進んで自分を低くし、他の人々に仕え、自分のいのちを犠牲にするなら、言い争ったりはしない」ということです。

主はご自分を空しくしてくださいませ。主はしもべの姿をとってくださいませ。主は人となってくださいませ。そして、主が「自らを低く」されたことが記されています。罪深い私たちのたましいを救うために、主はどんな深みにまでも下って来られたのです。何とありがたいことでしょう。

主は、「死にまで」従うことによって、「自らを低く」されました。これは私たちの目には驚くべきことです。主は、ご自分のいのちを犠牲にしてまでも従われました。「主は「死にまで、それも十字架の死にまで従われました」。

十字架にかけられて「死ぬ」ことは、最も屈辱的な仕方でも処刑されることでした。それは、殺人犯のためだけに備えられた絞首台、電気椅子、ガス室に匹敵するものでした。

「天で最上のお方」がこの世に来られた時、そのような「死」が定められていたのです。主には、ベッドの上で普通に死ぬことは許されていませんでした。事故死や不慮の死を遂げることもありませんでした。「十字架の死」という恥すべき死に方をしなければならなかったのです。

8節までには、主イエスがなされたことが記されています。主は自己犠牲の道をお取りになりました。主は自分で名をあげようとはなさいませんでした。むしろ、自らを低くされたのです。

しかし、9節からは、神がなされたことが記されています。救い主はご自分を低くされましたが、「神は」このお方を「高く上げて」くださった。自分で名声を得ようとはなさらなかったが、「神は」主に「すべての名にまさる名をお与えに」なりました。

主は他の人々に仕えるためにご自分のひざをかがめられましたが、神は「すべて」が主に「ひざをかがめる」ことを命じられました。

これには、ピリピの信者たちにとって(そして、私たちにとって)どんな教訓があるのでしょうか。「上に行くためには、下に行かなければならない」ということです。

私たちは自分を高くするのではなく、他の人々のしもべとなるべきなのです。そうすれば神が、ちょうど良い時に、私たちを高くしてくださるのです。

神は、キリストを死者の中からよみがえらせ、天を開いて再び迎え入れ、ご自分の右の座に着かせてくださいました。そのようにすることによって、キリストを高く引き上げてくださったのです。それだけではありません。神は「すべての名にまさる名」を主に「お与え」になったのです。

驚くべき救いのご計画をされた父なる神に、そしてそのご計画を完全に成し遂げて下さった御子の主イエス様に栄光がいつまでもありますように。(福島勲)

貴重なご感想をありがとうございました。

今回はマナ1月号の感想を2月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。(永井)